

緩和医療：自然な過程としての死を如何に受け止めるか

鎌ヶ谷総合病院脳神経内科
湯浅龍彦

今や我が国は世界に環たる高齢化社会を迎えている。これは、一方では戦後の経済発展、そして、他方では公衆衛生の改善、医療技術の進歩に裏打ちされるものである。本日のテーマである緩和医療は、こうした時代背景の中から生まれた新分野である。そこでは、到達した長寿という現実とは裏腹に「死」というものを如何に捉え、如何に向き合うかが問われるに至ったということでもある。

死は生物学的必然であると同時に、哲学的・宗教的な命題でもある。

そこで、緩和医療で論ずべき「死」とは、生命の過程である生、病、老、死の中の一過程であり、医療技術の一端を占める科学的過程としての「死」であると同時に、社会的な関係性に於いて論じるべき命題である。つまり、緩和医療に携わる者の資質が問われるのであり、高邁な人間力が求められる。生の延伸の先に必ず訪れる死を、自然な過程として見極めて行く医療者としての技能と資質が問われると考える。

ところで現在わが国では、緩和医療が技術として承認されている分野は専ら癌に限られる。しかし、緩和医療は本来、死に直面する高齢者や ALS のような難病患者をも含むより広範な概念として捉えるべきであろう。そうした広義の緩和医療の現状を癌、ALS、老化と比較すると以下の様である（表-1）。

まず、現時点で何らかの根本治療が望めるのは、実は癌であり、他方、加齢やそれに伴う高齢問題は、食事や栄養、運動などが予防医療として取り上げられるが、加齢を防ぎ止める術はない。又、難病である ALS に於いては、様々な支援技術の進歩があり、最近一部の病型で核酸療法など治療の可能性が出てきたものの大半の病型では未だ根治療法はないのである。

そうした中で、鍼灸の立ち位置であるが、健康の為の鍼灸、そして、緩和医療としての鍼灸が想定されよう。疼痛を緩和し、免疫を高めて癌患者の命の延伸を図

るなど、現代では病態生理に迫る鍼灸の力が示されている。そうした時、死を意識した高齢者の緩和を目指す鍼灸も今後の大いなる課題となろう。そして、死をまじかに意識することとなった高齢者（今や我が国のマジョリティー）や ALS に代表される神経難病に対する鍼灸は、気を整え、死に向かう気概を高めその日まで真っ直ぐに生き抜く力を涵養することに期待が持たれるのである。

以上のような立場に立って、予防鍼灸研究会では今後より積極的に緩和医療の分野に軸足を置き、生を尊び、死に赴くことをも自然の摂理と考えて命を支える技を磨いて行かれんことを願うものである（1073 文字）。

表-1)死をも自然科学の中で捉えて行く技術：
緩和医療と鍼灸の現状

	現在の 緩和医療	緩和医療と しての鍼灸
癌患者	○	○
高齢／加齢	▲	○
ALS 患者	▲	○

（○一部可能；▲困難）